第 39 回　台風と軍事作戦等

航空気象群ホームページ「気象の杜」へようこそ。今回はこれから本格的な夏を迎えるにあたり、日本周辺を通過していく台風が軍事作戦等に及ぼした影響などを紹介したいと思います。

第３０回のコラムにもありますが、台風は日本の南海上において年間約２５個発生し、そのうち約１２個が日本に接近、約３個が上陸します。特に７月～１０月は台風が接近することが多く、暴風、大雨、高潮、高波などの災害を引き起こします。こうした災害は、農業における作物の収穫や防災情報のほか、軍事作戦等の分野にとっても大きな影響を受ける要素であり、気象予報はこれらを克服・利用しようと発展してきました。

引用：気象庁ＨＰ　台風の統計資料

台風の平年値

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
発生数（注1）	0.3	0.3	0.3	0.6	1.0	1.7	3.7	5.7	5.0	3.4	2.2	1.0	**25.1**
接近数（注2）				0.2	0.7	0.8	2.1	3.3	3.3	1.7	0.5	0.1	**11.7**
上陸数（注3）					0.0	0.2	0.6	0.9	1.0	0.3			**3.0**

（注1）「発生」は協定世界時(UTC)を基準にしています。
（注2）「接近」は台風の中心が国内のいずれかの気象官署から300 km以内に入った場合を指します。
（注3）「上陸」は台風の中心が北海道、本州、四国、九州の海岸線に達した場合を指します。

日本において、台風が軍事に大きな影響を与えた古い例として、特に有名なものに元寇（げんこう）があります。一回目の襲来である文永の役は１２７４年の１１月後半頃、二回目となる弘安の役は１２８１年の８月中旬～下旬に起こりました（月は現在の暦）。この元寇においては、そのどちらにも大きな嵐の存在が記録に残っています。特に弘安の役については、その時期から考えてもこの大きな嵐の正体は台風だといわれています。結果として、日本の勝利に大きな影響をもたらしたこの現象は「神風」として、その後も語り継がれていきます。

夏期の台風の他にも、温帯低気圧の通過や冬季の北寄りの強い季節風により周辺の海が荒れやすい日本は、その後大規模な侵略を受けることはありませんでした。しかしながら、これらの現象は日本に利益

だけを与えてきたわけではありません。特に先の大戦の前には、日本海軍において大規模な海難事故も起きています。

第四艦隊事件といわれるこの事件は１９３５年９月２６日、岩手県東方沖約２５０海里地点で起こりました。当日の朝の情報により、午後には艦隊と台風が遭遇することは分かっていたものの、回避するには既に海況が悪化していたことや台風の克服も艦隊の練度向上につながるという判断のもと、回避は行わずに予定通りの航行を続けることとなりました。その結果、風の強くなる台風右側に位置していた水雷戦隊などを中心に４１隻中１９隻が被害を受けることとなりました。特に駆逐艦初雪と夕霧は波浪により艦首部分が切断、駆逐艦睦月、菊月、三日月、朝風は艦橋が大破、軽空母龍驤は高波により艦橋が圧壊するなどの大きな被害を受けました。転覆・沈没艦は無かったものの、多くの死者を出すこととなり、日本海軍の特に新鋭艦の艦船設計に対して大きな影響を与えました。この教訓の結果、日本海軍は先の大戦中に台風による同様の事故は起きていません。

しかし、日本海軍と相対した米海軍は何度も台風による大きな被害を受けています。特に有名なのは１９４４年１２月、のちにコブラ台風と名付けられた台風により、駆逐艦３隻が沈没、１４６機の航空機を失い７９０名の水兵が命を落とす結果となりました。沈まなかった艦船でも、空母や戦艦などの大型艦も含めて大小さまざまな被害を受けています。１９４５年の６月にはコニーと名付けられた台風によって６名の犠牲と多くの艦艇が損傷、そして７０機を超える航空機を失いました。この事故のすぐ後に米軍はＢ－２９を用いた暴風雨の偵察任務を開始します。余談ですが、このＢ－２９が送信する気象報（もちろん暗号化されている）は南洋の島々を失っていた日本にとっては貴重な情報となっており、受信したら直ちに解読して利用していました。終戦後、これらの偵察機が飛ばなくなったことで台風の予報精度が急に低下した、と当時陸軍気象部にいたある大佐は述べています。

終戦直後の１０月にも阿久根台風が襲来、沖縄の中城湾において米軍の上陸用舟艇などの艦船１２隻が沈没、２２２隻が座礁、３２隻が大破し、陸上に作られたプレハブの施設などの８０％が倒壊、６０機以上の航空機が損傷するという被害を受けました。また、軍事からは少し離れますが、１９５４年には洞爺丸をはじめとした青函連絡船の５隻が台風により相次いで転覆や船体破断により沈没し、合計で１４３０名の命が失われています。

ここまで台風が軍事に与えた影響などについて代表的なものを書いてきましたが、これらの出来事をきっかけとして台風の研究が進んできたという一面もあります。第四艦隊事件の際、広範囲で多数の艦艇が観測した記録はその後の台風の構造を知るための貴重なデータとなりました。前述した航空機による気象観測は現在も北大西洋のハリケーンに対して米空軍の天候偵察中隊が輸送機を改造した機体で直接ハリケーンに飛び込んで観測するという形で行われています。そうした観測データや記録が活用され、現在の台風に関する予報につながっています。

日本周辺ではここで紹介した事例以外にも、何度も台風によって大きな被害が発生してきました。当然のことながら、当時から台風は危険なものだという認識を皆が持っていました。しかし、しばしば楽観的な判断がなされた際などに取り返しのつかない被害を受けてきています。そもそも台風とは非常に強力なエネルギーを伴った現象であり、全く軽視できる現象ではありません。台風によって遠く離れた地点にある前線が刺激されて集中豪雨が引き起こされたり、高いうねりが数千キロ離れた地点で観測されることもあります。その上、台風の進路や勢力は様々な要素を受けて複雑に変化するため、その予想は非常に難しいものです。

冒頭でも述べましたが、これから日本は本格的な夏を迎えます。様々なレジャーを計画されている方もいらっしゃると思いますが、くれぐれも過去の教訓を無駄にしないようお過ごしください。

出典：Naval History and Heritage Command
- Typhoons and Hurricanes : The Effects of Cyclonic Winds on U.S.Naval Operations
中川　勇　編著（１９８６）「陸軍気象史」